「隠された意味へ」（『哲学宗教日記』訳者解説）の意義
――キェルケゴール研究の観点から――

鈴木　祐丞

序

ウィトゲンシュタイン（1889－1951）は、1930 年から 1932 年、および 1936 年から 1937 年にかけて、断続的に日記をつけていた。この時期は、『論理哲学論考』に代表される前期の思想から『哲学探究』に代表される後期の思想への移行のタイミングにあたり、その日記は、「新しい思想を産み出そうとしたウィトゲンシュタインが直面しなければならなかった精神的・宗教的体験とそれをめぐる思索の記録」[1]である。

ウィトゲンシュタインの死後、親しかった友人が長らく保管していたこの日記が、はじめて研究者の手に渡ったのは、1993 年末のことであった [2]。ウィトゲンシュタインの遺稿目録に加えられ、「MS183」とナンバリングされたこの「日記」（以下本稿では MS183 のことを「日記」と表記する）は、まず原語のドイツ語で 1997 年に出版され [3]、2003 年には英訳が出版された [4]。そしてその後 2005 年に、鬼界彰夫の手により邦訳され、『哲学宗教日記』と題されて出版された [5]。

「日記」の各国語版から『哲学宗教日記』を際立たせているのは、『哲学宗教日記』末に付された訳者解説「隠された意味へ」[6]である。私見では「隠された意味へ」がもつ意義はきわめて大きい。概して、鬼界は「日記」の邦訳により多くの日本人に「日記」をアクセス可能なものにしたのだが、「隠された意味へ」により「日記」を理解可能なものにしたのだと言える。

本稿では、「隠された意味へ」の意義を、とくに筆者（鈴木）が専門とするキェルケゴール研究という観点から、さらに言えば、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係についての研究という観点から、浮かび上がらせたい。そしてまた、「隠された意味へ」に関して、一つの問いを投げかけたい。

1　「隠された意味へ」の意義

それでは、『哲学宗教日記』の訳者解説「隠された意味へ」の意義を、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係についての研究という観点から浮かび上がらせよう。以下では、1990 年代の「日記」の発見・出版以前、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係についての研究がどのような状況にあったか振り返ることから始める。そして「日記」の発見・出版以降も研究状況にさほど変化がなかったことを確認する。最後に、そこに「隠された意味へ」が登場することで何がもたらされたか考察する。

（1）「日記」の発見・出版以前の研究状況

ウィトゲンシュタインがキェルケゴールをかなり早い時期から熱心に読んだこと、そして彼から何らかの、おそらくはかなり大きな影響を受けたということは、おもに彼の友人・知人による証言を手がかりとして、1990 年代の「日記」の発見・出版以前から、研究者のあいだで広く知られていたようである [7]。例えば以下のような証言が「日記」の発見・出版以前から公になっていた。

> 彼［ウィトゲンシュタイン］はキェルケゴールやアンゲルス・シレジウスといった人の本を読んでいて、僧侶になることについて真剣に考えています。（ラッセルからオトリーン婦人への手紙、1919 年 12 月 20 日）[8]

> 彼［ウィトゲンシュタイン］は私に、原典でキェルケゴールが読めるようにデンマーク語を学習している、と言った。（リーの回想、1929 年から 1931 年ころ）[9]

> ［ウィトゲンシュタインは私に、］キェルケゴールは前世紀のずば抜けて深遠な思想家だ。彼は聖人だ［と言った］。（ドゥルーリーの回想、1930 年代から 1951 年ころまでの会話）[10]

> 彼［ウィトゲンシュタイン］はまた、キェルケゴールを高く評価していた。「本当に宗教的な人だ」というような表現を使い、何か畏敬の念をこめてキェルケゴ

ールについて語っていた。（マルコムの回想、1938 年秋以降）[11]

彼［ウィトゲンシュタイン］もいくらか［キェルケゴールを］読んでいた。キェルケゴールはとても真剣だ。だが彼はキェルケゴールをそれほど読むことはできなかった。……キェルケゴールはウィトゲンシュタインのことを、ほとんど彼が俗物であるかのように、打ちのめしたのだった。（ブーズマの回想、1949 年 11 月）[12]

しかしながら、これらの証言は、たしかにウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの何らかの関係の存在を告げ知らせてはいるものの、その関係の内実についてはほとんど何も語っていないように思われる――なぜウィトゲンシュタインはキェルケゴールを評して「本当に宗教的な人だ」と言ったのだろうか、どうしてウィトゲンシュタインはキェルケゴールによって自分が俗物であるかのように打ちのめされたのだろうか。

1990 年代の「日記」の発見・出版以前、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の解明に役立ちうる、研究者が利用可能だった資料としては、上掲に代表される友人・知人の証言のほかに、ウィトゲンシュタインの非哲学的主題についての雑考集[13]（邦訳は『反哲学的断章』[14]）も存在していた。そこからは、例えば「知恵には情熱はない。それにたいしてキルケゴールは、信仰を情熱と呼んでいる」（1946 年 10 月 11 日）[15]といった言葉を拾うことができる。雑考集のほうはウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の特定化に多少は寄与するかもしれない。例えば、その言葉から、ウィトゲンシュタインはキェルケゴールの『非学問的あとがき』を読み、同書で描き出されている「情熱」としての信仰観を共有していた、といった知見を導き出すことは不可能ではないと思われる。とはいえ、この雑考集を資料に数え入れたとしても、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の内実については、依然として解明の手がかりがほぼないまま、雲をつかむような状況であったことに変わりはなかったと思われる。

おそらくこのような状況であったがゆえに、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係について、「日記」の発見・出版以前は熱心に研究されることはほとんどなかったようである[16]。またその関係を扱った希少な研究の中には、たしかにウィトゲンシュタインはキェルケゴールを読んだものの、ウィトゲンシュタインの宗教思想の

うちにキェルケゴールの直接的影響はほとんど見られないとった見解[17]——今日からすれば誤りと思われる見解——も混在し、質的にも十分ではなかったと思われる。

（2）「日記」の発見・出版以降の研究状況

こうした膠着した状況の中に現れたのが「日記」であった。

「日記」においてウィトゲンシュタインが「キェルケゴール」に言及することじつに十回を数える。上述の雑考集ではその数が四回にすぎない（より正確に言えば、MS183（「日記」）を除いたウィトゲンシュタインの遺稿における、「キェルケゴール」の登場回数が四回にすぎない）ことに鑑みれば、「日記」における「キェルケゴール」の登場回数の多さが認識できるだろう。こうした数量的な側面のみならず、質的な側面からも、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の解明にあたって、「日記」は注目に値すると言うことができる。先に触れたように、ウィトゲンシュタインは「日記」において精神的・宗教的苦闘（その詳細は後述）の渦中にあったのであり、その文脈において「キェルケゴール」に言及していることから、証言や雑考集とは異なり、「日記」はウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の内実の解明の可能性を秘めているのである。

文脈から切り離しては真意は把握しえないと思われるが、参考までに、「日記」におけるウィトゲンシュタインの「キェルケゴール」の言及の例を示しておく。

> 良心に苦しめられ、そのため仕事ができない。キルケゴールの著作を読んで、これまでもそうだったが、いっそう不安になった。私は苦しもうとしない。このことが私を不安にさせる。どんな便利さも、どんな楽しみも、私は断念しようとしない。（1937 年 2 月 13 日）[18]

> 自分にとって謙虚であることほど難しいことはない。キルケゴールを読んでいるので、このことに今再び気づく。自分が負けたと感じることほど私にとってつらいことはない。問題になっているのが、ただ真実をありのままに見ることに過ぎないのに、そうなのである。（1937 年 2 月 18 日）[19]

こうして、「日記」の発見・出版により、ようやくウィトゲンシュタインのキェルケ

ゴールへの関係の内実――なぜウィトゲンシュタインはキェルケゴールを評して「本当に宗教的な人だ」と言ったのか、どうしてウィトゲンシュタインはキェルケゴールによって自分が俗物であるかのように打ちのめされたのか、など――の解明へ向けて、足場が整備されたと言えるだろう。

それでは、1990 年代に「日記」を新たな資料として手に入れ、研究者たちはこれまで、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係について、どのような知見を導き出してきただろうか。「日記」の発見・出版以降になされた、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係についての研究を俯瞰してみると、じつはその関係の内実については、ほぼ手付かずのままだったことに気づく。なるほどウィトゲンシュタインがキェルケゴールの何を読んだのかといった点に関しては、多くのことが指摘されるようになったのは事実である。例えば、ウィトゲンシュタインは「日記」の時期にキェルケゴールの『死に至る病』『不安の概念』『哲学的断片』『キリスト教の修練』などを読んだのだという指摘がされている [20]。だがウィトゲンシュタインがそれらをいったいどのように読んだのかという点については、きわめて皮相的なことしか指摘されてこなかったように思われる。ウィトゲンシュタインは「日記」の時期のキェルケゴール読書を通じて、キェルケゴールの「逆説」「罪」「瞬間」といった概念をわがものにしたのだという指摘 [21]、宗教は倫理を包有するというキェルケゴール的見解がウィトゲンシュタインの「日記」にも読み取れるという指摘 [22]などがそれである。

つまり、ウィトゲンシュタインは「日記」において何らかの精神的・宗教的苦闘の渦中にあり、必要に迫られてキェルケゴールを手に取り、そこでキェルケゴールがウィトゲンシュタインにとって何らかの糧となったはずなのであり、この文脈を捉えることではじめてウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の内実が把握可能となると思われるのだが、「日記」の発見・出版以降もこれまでの研究ではその文脈が捉え損ねられ、その結果ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の内実は解明されることがなく、むしろウィトゲンシュタインはキェルケゴールのどの本を読んだか、両者にどのような思想的類似が存在するかといった、皮相的と思われる指摘ばかりが増殖してきた [23]と考えらえるのである。「日記」において精神的・宗教的苦闘を乗り越えたウィトゲンシュタインが、後年になって、キェルケゴールのことを畏敬の念をこめて「本当に宗教的な人だ」と呼ぶことの意味、キェルケゴールは自分のことを俗物であるかのように打ちのめしたのだと語ることの意味など、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係において本質的と思われる部分については、1990 年

代の「日記」の発見・出版以降も、ほとんど解明されないままだったのである。

(3)「隠された意味へ」がもたらしたもの

なぜ「日記」の発見・出版以降も、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の内実についての解明は、ほぼ手つかずのままだったのだろうか。その最大の要因を、鬼界の言葉を借りて説明しよう。

> ［「日記」が書かれた 1930 年から 37 年という時期に鑑みれば、「日記」の内容は『論考』から『探究』への歴史的移行と深くかかわっていると推察されるものの、「日記」でウィトゲンシュタインが向き合っている］問題がいかなるものであるかについて、この日記は具体的な記述をまったく読者に提供していない。著者の臆病さや虚栄心をめぐる様々な心象風景の描写はこれでもかというほど次々と登場するものの、その背後でそれらを産み出している根源的問題が何なのかについて、読者は、終始霧の中に置かれたままである。[24]

つまり、ウィトゲンシュタインが「日記」においてその渦中にあり、まさにそれゆえにこそキェルケゴールに手を伸ばした、彼の精神的・宗教的苦闘について、その正確な把握がきわめて困難なのである。たしかに「日記」に目を通せば、ウィトゲンシュタインが何らかの罪意識に苦しみ、それと向き合い、その過程でキェルケゴールにも近づいたのだろうということ、そしておそらくはキェルケゴールからヒントのようなものを得て、罪意識という問題に一定の解決がもたらされたのだろうという粗いプロットは、うかがい知られはする。だが何の手助けもなしに「日記」を読んだとしても、いったいウィトゲンシュタインが持っていた罪意識の正体は何か、その解決は彼に何をもたらすのか、そしてそれはいかにして可能なのかといったことは把握がきわめて困難であり、精神的・宗教的苦闘の全体を正しく理解することがほぼ不可能なのである。

このような「日記」解釈の難しさを要因として、「日記」の発見・出版以降も、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の内実については、ほぼ未解明のままであったものと思われる。「日記」の邦訳『哲学宗教日記』に付された鬼界による訳者解説「隠された意味へ」の意義の一端は、ここに形をとる。すなわち、鬼界は「隠され

た意味へ」において、「日記」に描かれているウィトゲンシュタインの精神的・宗教的苦闘について、踏み込んだ解釈を提示し、その全体像をつまびらかにしたのであり、それにより、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の内実の解明の道がひらかれることにもなったのである。念のため付言すれば、「日記」のドイツ語版においても英訳版においても、「隠された意味へ」に類する、ウィトゲンシュタインの精神的・宗教的苦闘についての詳説は付されていない。

それでは、「隠された意味へ」によって、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の内実について、どのような理解がもたらされるのであろうか[25]。

まず「隠された意味へ」の中心的内容を簡潔にまとめたい。鬼界は「日記」に描き出されているウィトゲンシュタインの精神的・宗教的苦闘の中心線を「ウィトゲンシュタインの精神が『論考』という自己の過去／原罪に正対し、それを直視し、自らの死と再生を通じて自らを清め離し、それによって『探求』という清らかな次元を実現できる新たな精神へと自らが成ってゆく、困難な歩み」[26]としてとらえる。それは言い換えれば、「『論考』から『探求』への移行が哲学上の理論的行為ではなく、自己の生にかかわる宗教・倫理的行為であったという法外な事態がこうして成立する。『哲学宗教日記』とは、この宗教・倫理的行為の記録にほかならない」[27]ということである。ウィトゲンシュタインは[28]、『論考』に端を発する罪の赦しの信仰へ向けての歩みにおいて、最終的に「キリストの犠牲による人間の救済という事実」の自分にとっての意味を考えるようになり、そこでキリストという理想的な存在との対比により現実の自分自身に実直に向き合い、その果てに「あるがままの私の宗教」へと行きつくに至る。ウィトゲンシュタインがわがものとした「新約の信仰」とは、「完全な者としてのイエス・キリストを信仰するとは、自分を偽って彼にならう事ではなく、思いにおいて彼と一体化するとともに、自分の倫理的小ささ、惨めさをあるがままに認め、徹底的に低くなることだ、そしてそのことによって自らの罪を贖うことだ、という解釈」である。すなわちウィトゲンシュタインは、「「犠牲による救済」を行った者……の限りない高さと自らの限りない低さを否応なく認識」したのであり、「彼は、自分のあるがままの低さを認めることにより、自分がそのあるがままにおいて赦され、あるがままにおいて生きてゆくのを認められている、と認識した」のである。「こうした新約の信仰において、彼の自尊心・虚栄心は鎮まり、彼は偽善の絶望的な闇から解放され、あるがままの晴れやかさを得た」。

「隠された意味へ」が提示した「日記」におけるウィトゲンシュタインの精神的・

宗教的苦闘についてのこのような解釈は、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係について、次のような本質的な理解をもたらすものと思われる。すなわち、ウィトゲンシュタインは『論考』から『探求』への思想的移行にあたって、『論考』に端を発する自らの罪の赦しを求めざるをえなくなり、そこで自らを犠牲にして人間の罪を贖うキリストという存在と向き合い、キェルケゴールの『キリスト教の修練』（など）を手にし、その書に描き出されている、キリストに範をとった理想的なキリスト者の要求を自分に課す試みをしたのである。そしてその結果、そうした理想との対比でかえって現実の自分の罪深さを認識し、そしてそのような救いようのない自分のためにこそキリストの贖罪が存在することに気づき、あるがままの自分を肯定できるようになったのである。「日記」を通じてウィトゲンシュタインはこのようにキェルケゴールとかかわったがゆえに、後年、彼はキェルケゴールを評して「本当に宗教的な人だ」と言ったのであり、キェルケゴールによって自分が俗物であるかのように打ちのめされたと語ったのである。

2　「隠された意味へ」に関する問い

上述のように、『哲学宗教日記』に付された訳者解説「隠された意味へ」は、「日記」を理解可能なものにしたという点で、そしてそれにより例えばウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の内実の解明の道をひらいたという点で、きわめて大きな意義をもつものと思われる。その意義を十分に認めた上で、ここでは、「隠された意味へ」に関して、その筆者である鬼界彰夫氏に一つの問いを投げかけさせていただきたい。

それは、おもに「隠された意味へ」第七節「ウィトゲンシュタインにとっての哲学と宗教」[29]にかかわる問いであるので、まずその第七節の内容を概観してみる[30]。「隠された意味へ」の第六節までで上述のような「日記」の解釈を提示し終え、鬼界は第七節で、「ウィトゲンシュタインにとって哲学と宗教がどのように関係していたのか、彼にとって思考することと生きることがどのように関係していたのか」という、より根本的な問題を考察する。鬼界はまず、「『論考』から『探求』への移行における哲学的思考の変化と、彼自身の宗教・倫理的生の変化の間に、見事な相関関係（平行性）が存在する」ことを指摘する。その平行性とは、「理想により現実を欺く態度から、理想を尊重しながらも現実をありのままに受け入れる態度への変化」である。哲学的思

考の変化について言えば、ウィトゲンシュタインは、『論考』においては、「論理学や哲学の対象は、燃やせば消滅するようなものではなく、不変で、普遍的な存在であり、論理法則は実在する、という観念」を有し、「一方でありのままの言語のあり方を尊重しながら……、他方で厳密で普遍的な存在として「命題」、「論理」、「言語」といった対象を理解」していたのであって、その意味で「現実の中に（あるはずのない）理想を見出そうと」していた。それが『探求』になると、ウィトゲンシュタインは「理想というものを、現実の中に見出されるはずのものとしてでなく、「我々が現実をそれと比較する像、事態がどうなっているかを我々がそれを使って描く像……として理解」するようになったのであり、『論考』で描き出された言語の論理形式を、「現実の言語に存在する何かではなく、それを使うと言語がうまく理解できる一種の補助線のようなもの」として理解するようになった。そして宗教・倫理的生の変化について言えば、ウィトゲンシュタインは、『論考』の時期には、その完成直後から「自己を偽って理想を演じることに悩み続けた」のであったが、それが、『探求』への移行期にあたる「日記」において、「「完全な者」という生の理想から自分を切り離し、自分のあるがままの低さを認め謙虚に生きる、という新たな「理想」概念」を手にするという変化を遂げたのだった。このように『論考』から『探求』への移行において、哲学的思考の変化と宗教・倫理的生の変化に平行性が存在することを指摘した上で、鬼界は、「彼の生と宗教は、彼の徹底した哲学的思考に導かれていたように思われる」と述べる。「すなわち、『論考』で自分が描き出した言語の精緻な論理的構造が、実は現実の言語に見出されるものではなく、言語を理解するために我々が利用する物差しや図にすぎないという、『論考』的自己にはまことに苦渋に満ちた認識に到達することによってのみ、ウィトゲンシュタインは宗教的生において理想と自分の新たな関係を見出すことができたのではないかと思われる」。言い換えれば、「彼にとっては、厳しい哲学的思考が生を導く灯となっていたように思われる」ということである。

さて、『論考』から『探求』への移行において、ウィトゲンシュタインの哲学的思考の変化と宗教・倫理的生の変化に、鬼界が指摘するような平行性が存在することは、「日記」の内容からも疑いえないと思われる。また、前者が後者を導いたとする鬼界の考えについても、『探求』の生成史（ウィトゲンシュタインはすでに 1931 年以来、『論考』の哲学的思考を変化させてきた[31]）を考慮に入れれば、やはりうなずけるものである。だが、これらを受けいれるとき、どうしても「なぜ？」という疑問がわいてくるのである。「理想（論理形式）の存在を現実の言語の中に求めようとすることの

誤りを認識し、むしろ理想を現実のあるがままの言語の使用をうまく理解するための補助線のようなものと見るべきであると考えるようになった哲学的思考の変化が、キリストという理想を、現実に倣うべき存在としてではなく、罪深い現実の自分のあり方を認識する物差しとしてとらえるべきであるという宗教・倫理的生の変化をもたらした」――このような哲学的思考における変化と宗教・倫理的生における変化は、そもそも必然的に平行するものではなければ、因果関係によって結びついたものでもないはずである。つまり、そうした哲学的思考の変化を経験しながらも、宗教・倫理的生においてはキリストを依然として現実に倣うべき理想として見なして生きていくとしても（あるいはその逆であっても）、あるいは、そうした哲学的思考の変化を経験しながらも、宗教・倫理的生においてはそもそも理想という概念と何ら関わりを持たずに生きるとしても、とくに矛盾はないし、不誠実であるわけでもない（ように思われる）。それにもかかわらず、ウィトゲンシュタインにおいては、なぜこれら両者につながりがあり、さらにはなぜ哲学的思考の変化が宗教・倫理的生の変化を導くことになったのだろうか。

すぐに思いつく説明としては、まず哲学的思考において理想を現実の中に求めようとすることの誤りを認識するになったウィトゲンシュタインが、その後宗教・倫理的生においてもその認識を適用すればよいのだと気づくようになった、ということではある。だがそれだけで説明をすませてしまうならば、哲学的思考における「理想」との向き合いと宗教・倫理的生におけるそれとのあいだの平行性を、ただ偶然的なものとみなすことになってしまいかねないように思われる。「日記」および「隠された意味へ」からは、それらはウィトゲンシュタインにおいて必然的に結びついていたような印象を受ける――だからこそ、『探求』が産声を上げようとしていたまさにこの時期に、「日記」に描き出されている精神的・宗教的苦闘が生じた（生じざるをえなかった）のではなかろうか。とするならば、上述のような説明では何が足りないのだろうか。ウィトゲンシュタインにおいてそれらはなぜ・いかにして必然的に結びついていたのだろうか。

付言すると、この問いかけは、ウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係というトピックとも深くかかわる。既述のように、「日記」から、この時期にウィトゲンシュタインはキェルケゴールの『キリスト教の修練』などを読み、そこに描き出されている理想的キリスト者像と自分を対比し、それを契機として宗教・倫理的生の変化を経験したことが知られる。このように「日記」の時期、宗教・倫理的生においてウ

ィトゲンシュタインはキェルケゴールに関係したと考えられるのだが、はたしてウィトゲンシュタインは平行して生じた哲学的思考の変化においてもキェルケゴールに関係したと言ってよいのだろうか。端的に言って、『探求』の中にキェルケゴールの影響は（どれくらい）認められるべきなのだろうか。ウィトゲンシュタインにおいて哲学的思考の変化と宗教・倫理的生の変化がどのような形で結びついていたかが知られることにより、このような問いに対しても解明の道がひらかれうるように思われる。

---

[1] ルートヴィッヒ・ウィトゲンシュタイン『ウィトゲンシュタイン哲学宗教日記』、イルゼ・ゾマヴィラ編、鬼界彰夫訳、講談社、2005 年、4 頁。
[2] 日記の発見と刊行の経緯については、『哲学宗教日記』6–10 頁参照。
[3] Ludwig Wittgenstein, *Ludwig Wittgenstein: Denkbewegungen. Tagebücher 1930–1932, 1936–1937*, Hrsg. Ilse Somavilla, Innsbruck: Haymon Verlag 1997.
[4] Ludwig Wittgenstein, *Ludwig Wittgenstein: Public and Private Occasions*, eds. James C. Klagge and Alfred Nordmann, Maryland: Rowman & Littlefield 2003.
[5] 注 1 参照。
[6] 『哲学宗教日記』272–317 頁。
[7] ウィトゲンシュタインがキェルケゴールの何を読んだ（所有していた）か、ウィトゲンシュタインがキェルケゴールについてどのようなことを述べたかなどについては、拙論「ウィトゲンシュタインとキェルケゴール――研究のための資料」（『秋田県立大学総合科学研究彙報』、第 19 号、2018 年、9–23 頁）参照。
[8] *Ludwig Wittgenstein: Cambridge Letters*, eds. Brian McGuinness and G. H. von Wright, Oxford: Blackwell 1995, p. 140.
[9] H. D. P. Lee, ‘Wittgenstein 1929–1931,’ in *Philosophy* Vol. 54, Issue 218, 1979, p. 218.
[10] M. O’C. Drury, ‘Some Notes on Conversations with Wittgenstein,’ in *Ludwig Wittgenstein: Personal Recollections*, ed. Rush Rhees, Totowa-New Jersey: Rowmand and Littlefield 1981, pp. 102–104.
[11] Norman Malcolm, *Ludwig Wittgenstein, A Memoir*, Oxford: Oxford University Press 1958, p. 71.
[12] Oets K. Bouwsma, *Wittgenstein, Conversations 1949–1951*, eds. Craft, J. L., and Hustwit, R. E., Indianapolis: Hackett Publishing Company 1986, p. 46.
[13] Ludwig Wittgenstein, *Vermischte Bemerkungen*, Hrsg. Georg Henrik von Wright, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag 1977. 英訳は Ludwig Wittgenstein, *Culture and Value*, tr. by Peter Winch, Chicago: The University of Chicago Press 1980.
[14] ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『反哲学的断章』、丘沢静也訳、青土社、1999 年。
[15] MS132, 167（『反哲学的断章』151–152 頁）。
[16] 「日記」の発見・出版以前のウィトゲンシュタインのキェルケゴールへの関係の研究状況については、シェンバウムスフェルドの研究（Genia Schönbaumsfeld, *A Confusion of the Spheres*, New York: Oxford University Press 2007, pp. 10–13）を参照されたい。
[17] Philip Shields, *Logic and Sin in the Writings of Ludwig Wittgenstein*, Chicago: University of Chicago Press 1993, p. 7.
[18] MS183, 166（『哲学宗教日記』116 頁）。
[19] MS183, 176（『哲学宗教日記』123 頁）。
[20] Schönbaumsfeld, p. 24. なお、これらのうち『死に至る病』については、ウィトゲンシュタインが読んだ（所有していた）確証はないように思われる。拙論「ウィトゲンシュタインとキェルケゴール」参照。
[21] Schönbaumsfeld, p. 24.
[22] Roe Fremstedal, ‘Wittgenstein som religionsfilosof - og spesielt forholdet til Kierkegaard og kristendommen i Denkbewegungen,’ *Norsk Filosofisk tidsskrift*, Nr. 03, 2006, s. 216–218.
[23] 拙論「ウィトゲンシュタインへのキェルケゴールへの影響について」（実存思想協会第 34 回

大会発表原稿、2018 年 6 月 23 日、於立教大学、5 頁）参照。
[24] 『哲学宗教日記』274 頁。
[25] 以下の内容について、詳細は拙論「ウィトゲンシュタインのキェルケゴール体験――『キリスト教の修練』の宗教哲学を生きること」（『宗教研究』、第 88 巻第 3 号、2014 年、127–151 頁）参照。
[26] 『哲学宗教日記』276 頁。
[27] 『哲学宗教日記』285–286 頁。
[28] この段落の以下の内容は、『哲学宗教日記』300–308 頁参照。
[29] 『哲学宗教日記』309–317 頁。
[30] この段落の以下の内容は、『哲学宗教日記』309–317 頁参照。
[31] 『哲学宗教日記』310 頁。

（すずき・ゆうすけ　秋田県立大学総合科学教育研究センター助教）